

## 時空を超えて

千葉県市原市 安藤 純代

年の頃ならいくつ位なのだろうか。

JR五井駅東口を下りて数分ほど歩いた所に孝標女の銅像が立っている。身長120センチほどか、華奢な身体で市女笠にそっと手をやり、眩しそうに空を見上げている。

そう云えば、この少女が京へと旅立ったとされる寛仁四年から治安元年の春にかけても、世の中には伝染病が蔓延し得体の知らない不穏な空気に包まれていたという。勿論、当時十代前半、花も恥じらう文学少女には、流行病など眼中になかったのかも知れない。そして、胸の中は源氏物語五十余巻のことで一杯だったのであらうか。

「孝標の女さん、現実にはキビしいですよ。なかなか小説や物語のようにはいかない。」

息せき切ってこの場所に走ってやってきた私は慌てて手元の時計を見る。四時四十五分。ちょうど、市内の障がい者支援施設に通所する息子の送迎バスが到着する時刻なのである。

目の前の孝標女の像を目印として、大きなマイクロボスがゆっくりと止まる。扉が開いて降りて来るのは、実に様々なハンデを持った方たちなのである。ダウン症の女性や、明らかな精神遅滞、行動障害の見られる方もおられる。しかし、どの顔も心なしか上

気して明るい解放感と安堵感に満ちておられるように感じられる。特に、雀の涙ほどと云ってしまえばそれまでだが〈工賃〉が支給された日の笑顔は何とも云えなく輝いていて、こちらまで明るい明るい気持ちにさせられる。

息子の障がい名は〈自閉症〉である。今年で三十三歳になる。

初めて〈自閉症〉という言葉を経験した口から告げられた時は、とうとうこういう時が来てしまったかと逃げ場を失ってしまったような閉塞感に捉われてしまった。例えて云えば、目の前に突然四方から鉄の柵がガシャリと下りて来てしまった感じ。或いは、広大無辺の暗黒宇宙の中に放り出され、布団ごとふわりふわりと浮き上がってしまった感じか。

「あつ、そうか。あなたの時代にはやっぱり自閉症なんて言葉はなかったんですよ。」

どうでもいいことかも知れないが、目の前の孝標女に話しかけてみたくなる。

悪霊や魍魎が跋扈する時代には、もしかして加持祈祷やお祓いだけが唯一の治療法だったのかも知れない。神仏や霊的なものにすがるといことが今よりずっとずっと切実で命に直結していた時代だったのであろう。

一千年の時を隔て二十一世紀となった今でも障がいを巡る様々な誤解や偏見は後を絶たない。或いは科学、文明という要素が加わったが故に余計に人の心にグサリとくるひと言が増えたのかも知れない。

「足りないのは『愛情』だよ。スキンシップだよ。」

「イヤ、亜鉛、カルシウムかもしれない。」

「とにかく百万円つんでみなさい。先祖の祟りだ。」

三十年とは云え、子育てを巡り色々な言葉と遭遇してきた。ワシオペ育児があたりまえ、発達障害に対する理解と受容が今と比べると雲泥の差だった頃のお話である。

今、息子はよく眠り、よく食べる。そして、よく喋る。四歳の時、言葉は無理かもしれないと云われショックを受けたことが嘘のような優しい青年に成長してくれた。

そして、家族で時々一緒に聖書を読むようにしている。

『疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにきなさい。休ませてあげよう。』  
(マタイ11・28)

『わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。』  
(イザヤ43・4)

『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現われるためである。』  
(ヨハネ9・3)

特に三番目の言葉は、自分を責め息子を責め、どうしようもなくなつた時に出会つた(へのちの言葉)なのである。

県内の木更津市から市原市へと嫁いで早や四十年近くになるが、障がい児者の母としての日常は相も変わらず多忙である。細切れのような時間が、強風にあおられた綿雲のように瞬く間に飛んで行ってしまふ。

洗濯、掃除、買い物、九十三歳になる実母の介護、最近でこそ少なくなつたが息子の対人トラブルへの謝罪や学習支援……。もつともつと重篤な障害を持つた方々を介助、療育しておられるご両

親から見られたら贅沢な悩みとしか映らないかもしれないが、結構ヘトヘト、クタクタになつてしまふ事が多い毎日だった。

「孝標むすめの女さん、ゴメンなさいね。今日も、更級日記ちゃんと読めなかつた。せつかくあなたがこの愛する町、市原のことを忘れずにちゃんと書き残して置いて下さつたのに……。」

自転車を止めてチラッと見る孝標の女像はキレイな虹の断片の上に立って、小さいけれどいつも凜とした姿で私に何かを語りかけてくれている様だ。

かつての私は、何とかして吾が子をフツの人間、イコール健常者に変えようと夢中になっていた。そして、それこそが障がい者の母親としてのミッションであると思ひ込んできた。

しかし、大脳辺縁系の発達障害は未だに未知の部分も多く、確とした治療法も与えられていない。隣で小さな寝息を立てながら眠り込んでいる息子を見るたび、云いようのない無力感、寂寥感に襲われることが屢々しばしばあつた。

しかし、そんな生活の中で私はいつの頃からか自分の気持ちを書き短歌にして詠むことを覚えた。十本ある指を五・七・五・七・七と繰り返して折りながら自己流の歌に仕上げてゆくのである。

・ある時は理解及ばず一篇の詩のごとくみる自閉症の息子  
・どこまでが個性どこから障害と蛙聴く夜の思ひはてなし

家族が寝しずまつた夜に、子を待つ校門の風の中で、或る時は怒りながら或る時は泣きながら下手クソな歌をいくつもいくつも作つてきた。

・花よりも葉の鮮やかさ目に沁みる子の描きたるソメキヨシノは

- ・おびえつつ一歩一歩と後ずさる子の嘘かなし吃音かなし
- ・公園のわんぱく山の日溜まりに恩赦待ちをりうす着の吾子は
- ・せかしつつ師走の朝に出だしたる子の落書きか硝子に残る

孝標の女さんに見せたら、

「これでも和歌なの。」

と笑われてしまうかもしれないが、作っている本人は結構必死なのである。瞬く間に過ぎてゆく子育ての時を、何とか生き生きと色鮮やかに、空気や光や汗や泪もろとも書き留めておきたい。もしかして孝標の女さん（今だに名前がわからなくてゴメンなさい）なら、わかって下さるかもしれない。

息子は、ゆっくりではあるが着実に人間として成長してきている。まさか二八〇〇グラムだった子が80キロを超える巨体になるとは思ってもみなかった。

- ・雪降れば黄の長靴をはきし子が二歳のままに従きくる気がす
- ・われになき優しさ、根気、喉ほとけ吾が子に見つつ朝粥すす
- わが子は、生まれてからずっと市原市在住である。生粋の「五井っ子」であり、現在は養老川にも程近く、遠く京葉コンビナーとも見渡せるB型作業所でパン作りに励んでいる。

かつて、この辺りは海上潟と呼ばれていたらしい。今でこそ見渡す限りの田園地帯が広がり、晴れた日には雪を被った富士山が近々と見えるが、万葉の時代には広大な干潟がつづき入り江になっただけとある。

「夏麻引く海上潟の沖つ洲に船は留めむさ夜ふけにけり」

万葉集卷十四3348

この古歌を何度か口遊みつつ、ゆっくりゆっくり風のおい、土の匂いを吸い込んでみる。すると、不思議なことに千年前の景色が一瞬にして甦り、実に壮大な心持ちになった。かつて上総の国に赴任した孝標一家も青々と広がる海原を目にしたのだろうか。足下ではどんな貝殻や海藻が採れたのだろうか。

埋立て前の木更津の海岸で幼少期を過ごした私は急に親近感を覚え、目の前に奈良時代がグググッと降りてきたような気持ちになった。

「ねえ、この辺りまで海だったらしいよ。だって海上や海保、海士有木なんて地名を見ればよくわかるもんね。」

「へえ、スゴ。海行きたいね。」

息子は急に生き生きとして、何やら宙に文字を書いている。宇宙との秘密の交信なのだろうか。

のってきた夫も口を挿む。

「青柳って地名だって、あのアオヤギの元になったのさ。バカ貝つて云ってる所もあるけどね。」

木更津出身の私は急に「おうよ。」と言いそうになる。確かにわが地元ではアオヤギなんて言ってる人はいなかった。

市原市は実に万葉名歌の豊庫なのである。千葉県全体に関連する歌が46首ある中で、市原市に関する歌が9首も入っている。これは面積の広さを加味したとしても驚異的なパーセンテージ。当時の市原がいかに房総の文化、政治の中心地であったかを如実に物語っていると思う。

秋になると海上から村上、さらには上総牛久にかけての一带に

は靱穀を燃やす煙が遠近に立ちのぼる。豊かな実りの季節の到来である。畝道を行けばミゾソバやカントウヨメナが咲き、ワレモコウやオミナエシも日当たりの良い土手に見られるようになる。

こんな頃だったのだろうか。孝標女が京へと旅立った季節は。

そんなことを考えながら家に帰ってきた私に、思いもかけないサブライズが届いたのは二〇一一年のことだった。

「第一回更級祭りだって?」

「仮装パレードをやるらしいの。一般公募でね。」

「まさか応募はしてないよね?」

「実は、そのまさかなのよ。」

後は推して知るべし。わが家は俄に『更級日記』一色になったのである。

さらに、あろう事かその配役、キャストイングについては我々の予想を遥かに超えたものだった。

「何だ、この〈孝標の息子〉というのは…。〈孝標の女〉じゃないのか。」

しかも、大学頭あたまとあるじゃないか。」

「たぶん、孝標むすめの女の兄さんだと思っうけど、うちの子の体格がいから選ばれただけだと思っうの。」

かくして、わが家の一人息子は榮えある第一回更級日記パレードで菅原孝標の息子定義さだよしを演じることになった。

更に更にである。微かな期待を抱きつつ恐る恐る開けた我が名宛ての封筒に書かれていたのは…。な、なんと〈庶民の女〉。

「ハハハッ、びったりじゃないか。そのまま出ればいい。」

「えっつ、義母か乳母ぐらい出来ると思つてたのに。何でえ?! 乞食みたいな格好だったらどうしよう。」

後の祭りである。言い出しっぺであったために私は引くに引けない事になってしまった。

その晩は、実に久しぶりに高校時代の国語便覧を引つ張り出してみた。〈庶民の女〉がどんな服装をしどんな暮らしをしていたのか気になって仕方なかったからである。

足は裸足で、身体には筵むしろのような物を巻いていただけかもしれない。そして髪はザンバラで藁で結んだだけか。二十一世紀の庶民の女は、千年前の庶民の女をいたくいたく慮る一夜を過ごしたのであった。

明けて二〇一一年一〇月一五日の空は抜けるように青かった。コスモスが秋の陽ざしにやさしく揺れて、沢山の人々が初めての催しに胸をふくらませ沿道を埋め尽くしていた。又、東日本震災からわずか半年ということもあり復興支援のためのコーナーも数多く見られた。

私は、この時生まれて初めて被衣かつき姿なる時代衣裳を着けて頂いた。本物の着付け師の方がわざわざ新幹線に乗って京都より来て下さり衣擦れの音もあざやかに着付けて下さったのである。

また、件の大学頭だいがくのあたま殿は如何にとお見上げ申しつれば、高々とした立烏帽子たちえぼしに上品な色合いの狩衣かりぎぬ装束で、わが子と云えども俄には声を掛け難がたかる威厳に満ちてお立ち遊ばしておられた。

そして、あんなに馬鹿にしていた主人はと云うと、言われもしないのにチョコマカと動き回りバシヤバシヤとシャッターを切つ

ている。

東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひいでたる人：十三  
になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所  
に移る。

『更級日記』冒頭

今、もう一度孝標女の像を見上げて問いかけてみる。

「あなたは、本当にこんなに細い足で京まで上って行かれたんですか。」

「私は草履をはいて200M歩いただけでマメが出来てしまいました。」

午後の光を受けて一瞬、孝標女の双眸そまへが輝いたように見えた。そして、どこからか小湊線の低い汽笛の音がポーッと響いてきた。